31. 高圧酸素療法（OHP）と看護

下平友江[*1)]　花岡美由紀[*1)]　小沼晴子[*1)]
入来　遼[*1)]　神山喜一[*2)]　吉田恒丸[*3)]
杉山弘行[*4)]

[*1)]都立荏原病院看護科
[*2)]　同　高圧酸素室
[*3)]　同　整形外科
[*4)]　同　脳神経外科

【目的】当院における高圧酸素治療患者は，中枢神経疾患患者が中心となっている。このため，患者は意識障害，見当識障害，運動感覚麻痺などを示すことが多く，高圧酸素療法に関し，患者や家族への指導，説明が不十分になりやすく，看護上も多くの問題が起こりがちであった。そこで，どのようにすれば患者が看護上安全，安楽にかつ効果的にOHPを受けられるのか，問題点を洗いだし，解決策を模索した。

【方法】他施設でのOHP看護の現状を比較検討後，当院における看護上の問題点として，耳抜き問題，患者や家族の理解，送迎上あるいはOHP連絡上のトラブルなどを引き出し，患者の理解度に合わせた看護手順を作成した。更に，それらを充実させるために，オリエンテーション用紙，痰吸引指導用紙，連絡表，週間予定表などを改め，過去8カ月間実施した。今回はその成果を報告する。

【結果】患者数は21名で，そのうち意識障害患者7名，半身麻痺患者8名，その他6名であった。疾患別には，脳梗塞10名，頭部外傷1名，その他10名であった。問題点としてあげられた上記の点はこの研究結果，①OHP中の耳抜き，痰吸引などのトラブルはなくなった，②患者や家族はオリエンテーションにより，安全，安楽にOHPを受けられた，③送迎トラブルは1件，見当識障害患者であった，④高圧酸素室とのトラブルも全くなくなった。

【結論】高圧下で治療を受ける患者にとっては，日常生活と全く異なる環境下に置かれるため，さまざまな不安がともない，治療上の障害となっている。そこで私達看護者側は少しでもその不安が取り除かれるよう努力する必要があり，今回の研究となり，OHP治療上の看護の必要性が再認識された。

32. 急性期脳梗塞における高圧酸素療法の効果—髄液乳酸値を中心として—

大島光子[*1)]　八木博司[*1)]　佐渡島省三[*2)]
上田一雄[*3)]　梁井俊郎[*2)]　藤島正敏[*2)]

[*1)]福岡八木厚生会病院
[*2)]九州大学医学部第2内科
[*3)]九州大学医療技術短期大学部

急性期脳梗塞の高圧酸素療法（以下OHP）の効果は種々の見解があるが，今回我々は脳虚血を反映する髄液乳酸値を経時的に測定することによりOHPの効果を検討したので報告する。

【対象および方法】昭和59年9月～60年12月までの急性期脳梗塞の入院症例17で，男10例，女7例，平均年令64.5才であった。OHPは2絶対気圧下に純酸素を投与し，1回を90分とし，軽症～中等度は1回/日，重症は2回/日施行で，平均20回行なった。発症日よりの平均病日はOHP直前4.9，10回後17.3，20回後29.4であった。髄液は腰椎穿刺により採取し，直ちに除蛋白を行ったあと，乳酸値（以下L値）を酵素法により測定した。病巣は急性期頭部CT scanを用いInfarction Index（I.I.）$=\frac{\text{最大病巣面積}}{\text{最大病巣部を含む大脳半球面積}}\times 100$（%）として求めた。臨床症状の評価，髄液採取はOHP直前，10回後，20回後に施行し，頭部CT scanはその間3～5回行なった。

【結果】初回の総合的臨床評価は，軽症11例，中等症3例，重症3例であった。OHP20回後の転帰がADL自立した例は，軽症，中等症の14例で，その初回髄液L値は平均1.87±0.2mM/l（M±SD），I.I.は2.4±0.96%（M±SE），重症の3例の転帰は，寝たきり2例，死亡1例で初回の髄液L値は平均2.72±0.3mM/l，I.I.は73.5±2.3%であった。平均髄液L値の経時的変化は，初回2.02±0.40mM/l，10回後1.80±0.29mM/l，20回後1.78±0.22mM/lと有意の低下を認めたが，この中で正常化したものは4/14（28.6%）であった。

【まとめ】急性期総合臨床評価が軽症～中等症で髄液L値が2.0mM/l前後，I.I.が小さい症例では，ADL及び自覚症状の改善に対するOHPの効果は期待できる。